

## 2019年度 大型図書 研究成果（経過）報告書

このことについて、下記のとおり報告いたします。

購入資料名	採択年度
「聖語蔵経巻」第8回-1（DVD 2枚、No.130-131）、同第8回-2（DVD 2枚、No.132-133）	2019年度
<p>1. 研究の概要について</p> <p>本資料は、東大寺尊勝院所蔵の古写本を集大成する「聖語蔵経巻」のうち「乙種写経」のカラーデジタル版である。</p> <p>『聖語蔵経巻』は、総計4,960巻のうち、写経之部を五期に分けて刊行中である。すでに、第一期：隋・唐経篇(243巻,CD-R22枚,2000年)、第二期：天平十二年御願経（第1回配本[239巻,CD-R22枚,2001年]、第2回配本[252巻,CD-R22枚,2002年]、第3回配本[259巻,CD-R22枚,2003年]）、第三期：神護景雲二年御願経(第1回配本[205巻,DVD3枚,2007年]、第2回配本[DVD3枚,2009年]、第3回配本[DVD 3枚,2010年])、第四期:甲種写経(第1回配本[158巻,DVD2枚,2011年]、第2回配本[158巻,DVD2枚,2012年])が刊行済みで、全巻本学図書館に配備されている。</p> <p>現在刊行中の第五期「乙種写経」は、総計290点2,012巻で、第1回配本[197巻,DVD4枚,2013年]、第2回配本[202巻,DVD4枚,2013年]、第3回配本[201巻,DVD4枚,2014年]、第4回配本[201巻,DVD4枚,2015年]、第5回配本[201巻,DVD4枚,2016年]、第6回配本[201巻,DVD4枚,2017年]、第7回配本[201巻,DVD4枚,2018年]が刊行され、次の第8回配本分が今回購入した資料である。その後、2020年12月に刊行された第五期第9回配本分(201巻, No.134-135, No.136-137)も、大型図書費によって購入配備でき、第10回配本で完結の予定である。</p> <p>この間、直近の第8回と第9回配本全巻が、大型図書費によって購入できたことで、本学深草図書館に、既刊分すべてが配備されることとなった学術的意義は大きい。</p> <p>すでに、赤尾栄慶氏、米田雄介氏らによって、特に唐経の分析がなされている。東アジア仏教文化圏は、漢字文化圏と重なるが、その中核は、中国・朝鮮半島・日本である。漢字文化圏の中でも、日本の南都をはじめとした各寺院に伝授されてきた経蔵は、すでに失われた経巻の概要を知る上で、世界的に見て極めて貴重な資料である。今回購入した資料を含む「聖語蔵」は、赤尾氏によれば「最も由緒正しき経蔵といってよい」とされている。</p> <p>今回購入した資料は、実見する機会のほとんどない「聖語蔵経巻」の鮮明なカラー画像をパソコン上で見ることができ点が特筆され、学術研究の点から非常に価値の高いものである。特に第8回配本で収録される巻の中に『阿毘曇経』等のアビダルマ文献、『成実論』、『華嚴経論』等のほか、『観所縁縁論釈』等の唯識論書などの仏教論書が多数含まれている点も重要である。また、奥書や書き込み、加点などを含む写本も含まれることから、書道史や書誌学的な見地からも研究対象ともなりうる。</p> <p>以上のように、本資料は、仏教学だけでなく、歴史学、文献学、文学、国語学、書道史など多くの研究分野にわたる第一級の資料であり、直截的な研究対象として研究成果に直結するわけではないが、写本資料の一大叢書として、龍谷大学図書館蔵書の一層の充実、さらには仏教系大学として誇るべき知的財産となっていることは疑いえない。</p> <p>現在、既配本全巻を所蔵しているのは、本学図書館以外では、佛教大学と国際仏教学大学院大学のみであり、近隣の大学でも、京都大学人文科学研究所、奈良女子大学、奈良大学、大阪大谷大学の一部、その他東京大学史料編纂所、東京女子大学、大東文化大学、鶴見大学、筑波大学、筑紫女学園大学、北海道大学、東北大学の諸大学の一部、そして、奈良文化財研究所、国立歴史民俗博物館の一部が所蔵されているに過ぎない（CiNii 図書で検索。本学含め17機関に所蔵。<a href="https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA84346442#anc-library">https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA84346442#anc-library</a> 2022/6/17アクセス）。</p>	

## 2. 購入資料の活用状況（活用予定を含む）について記入してください。

聖語蔵の経巻総数は、4,960巻とされ、そのうち、隋経が8件22巻、唐経は30件21巻となっている。2019年度に購入した資料は、「乙種」第五期第8回配本分(201巻)である。永村眞氏の「『聖語蔵乙種写経』の刊行に寄せて」によれば、東大寺の創建と発展に決定的な役割を果たした華嚴宗は、その教学の具体的な姿を尊勝院の経蔵である「聖語蔵」に伝えた。この東大寺「三倉」(正倉院)や「東南院文書」等と同じく、明治時代に皇室に献納され、現在は宮内庁正倉院事務所に管理される資料で、平安院政期から鎌倉・南北朝時代に成立したものと紹介されている。

現在、世界仏教文化研究センター基礎研究部門「西域総合研究班」では、武田科学振興財団・杏雨書屋の所蔵資料（『敦煌秘笈』）のうち、敦煌出土の漢字仏典写本について解読研究を進めているが、成実論などの写本研究に際して、対照可能な仏典が含まれている。また、龍谷ミュージアムでの展覧や、古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センターのデジタル復元などの参照資料となり得る可能性を秘めた史資料である。

この間、本配本分を含む既配備分について、収蔵経緯や書体等の調査をおこなった。写経の年代や収蔵経緯だけでなく、現代の修復の過程や責任者が分かった。No.2253と2254は、巻物のタイトルと修理記録用紙に書かれた経題が入れ代わっている。そこには、「正倉院事務所長・和田軍一」昭和34年6月修理36年12月、37年8月。「正倉院事務所長・土井弘」昭和39年2月とある。一方、『中論』（乙-3巻三まで）は、「大正11年11月修理之」「帝室博物館総長・三宅米吉」、「董事奈良帝室博物館長・久保田鼎」などの名前が見え、そのほか、土井弘、般野琢、久保田鼎、森林太郎、大島義脩、米田雄介らの名前がある。

本資料の公開により、中国で失われた経巻が、一部ではあるものの現存しており、それを鮮明なデジタル画像として見るができるようになった。非接触で写本の解読が可能となるだけでなく、拡大して料紙や訓点・返り点・見せ消し・墨点などの情報も得ることができる点の特筆できる。

申請時に「大型図書を使用する主な研究者」として挙げた、嵩満也、徐光輝、長谷川岳史、若原雄昭（2021年度定年退職）に加え、道元徹心(2021年度申請分)、早島慧氏(同)に、研究活用について依頼しているところである。

## 3. 研究発表状況（予定を含む）について記入してください。

【雑誌論文】特になし

【図書】特になし

【学会発表】XIXth IABS Congress 2022(2022年8月18日・ソウル大学校・パネル発表予定)

本図書購入の申請年度である2019年度に採択された「国際仏教学会(The International Association of Buddhist Studies, IABS)」は、当初2020年の開催であった。しかし、コロナ禍のため、2年間開催がずれ込み、2022年度8月14日～19日に開催されることとなった。2019年度より関係者とコンタクトをとりつつパネル発表を申請し、採択されたものであり、当初の予定通り、ソウル国立大学校で対面開催されることとなった。本学会は、発表にあたっての審査が厳しく、採択率の低い学会であることが知られており、日本からは数件しか採択されていない。

本報告者は、パネル代表者として「Buddhist Materials Excavated in Central Asia ---New Results of the Collections held in South Korea, China and Japan(中央アジア出土の仏教資料～韓国・中国・日本の大谷コレクションの最新研究成果)」のテーマのもと、全体の発表統括をおこなうとともに、「OTANI expedition～ On the Outline and the Contribution to Buddhist Study(大谷探検隊～その概要と仏教学への貢献)」のタイトルで、8月18日に口頭発表を行う予定である。

古写本や版本の研究のための参照資料として、中国国内で失われた比較的古い写経が遺されている聖語蔵は、古写本研究にとって、重要な情報を提示している。

今後、日本国内の写本研究に対し、西域総合研究班の中に、新たに発足した「小川貫弑師旧蔵資料の調査研究」グループが研究対象とする資料の中に、敦煌出土写本群や、大蔵経関連の版本群もあり、対照研究の必要性がさらに増している。今後案内される予定の第10回配本分を含め、全巻揃ってこそ価値のある資料である。直截的に言及したり、研究対象とするのではなくとも、比較対照研究や、古写本研究にとって重要な資料であることは言を俟たない。

今後、研究雑誌や図書等の刊行を通じて、本学図書館に「聖語蔵」経巻が配備されていること、世界に分蔵される古写本の研究環境が十全に整えられていることを周知していきたい。

☆資料購入後、**1年以内に研究経過報告書**を提出し、また、**3年以内に研究成果報告書**を提出してください。  
加えて著書または学術雑誌等により**研究成果の公表または学会発表**をしてください。  
☆公表の際には、参考文献として刊行物に明記してください。